

放送番組センターレポート

BROADCAST PROGRAMMING CENTER OF JAPAN Report

公益財団法人 放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110 <http://www.bpcj.or.jp/>

公開セミナー 番組アーカイブ活用と新たな展開2019

2019年11月9日、上智大学メディア・ジャーナリズム研究所との共催で、同大を会場に公開セミナー『番組アーカイブ活用と新たな展開2019 大学・放送局と放送ライブラリーの取組の報告』を開催した。放送ライブラリーの公開番組を、インターネットを利用して大学の授業や地方での上映会で活用するサービスを利用した方々を招き、事例報告とパネルディスカッションを行った。当サービスに関連するセミナーの開催は今年で3回目となる。

日間で17番組を上映し、677人にのぼった来場者からは「放送局が思いを1つにした試みは素晴らしい」「報道に携わる人の思いや悩みを知り、考えさせられた」等、高い評価を得られた。「震災報道への関心は今も高いことを実感し、震災に関する番組制作が、自局の存在感を高めると感じた」という。また「権利関係が複雑なドキュメンタリーの二次利用には障壁も多いが、番組センターでクリアできるのなら上映会もやりやすくなる」と語った。

【登壇者】今村庸一

(駿河台大学メディア情報学部教授)

鳥羽耕史 (早稲田大学文学学術院教授)

太田智己 (桐山女学園大学文化情報学部講師)

野口 剛

(東北放送報道制作局報道部 ニュースデスク)

【司会】音 好宏 (上智大学文学部教授)



■大学等での番組利活用例

今村教授は、「映像メディア論」の授業で東日本大震災に関する民放のドキュメンタリーを利用した。震災2か月後にIBC岩手放送が制作した『幾歳経とも要心あれ』は、ローカル局でしか作れない視点が学生には印象的だったと振り返り、「立ち位置によって、価値観が180度変わること気付いたと思う」と語った。

鳥羽教授は、「日本近代文学とマスメディア」の授業で安部公房作のラジオ・テレビドラマを利用した。「演劇や映画など多岐に渡った安部の活動の中でも、最も新しいメディアである放送に絞った。ドラマを読み解く作業を通じ、既存の文学観に囚われないアプローチを目指した」と話した。

太田講師は、「メディア情報分析」の授業で湾岸戦争に関するNHKスペシャルを利用した。「学生は当初、登場人物に感情的に反応し、人間以外のモチーフや背景には目が向かない傾向があった。全てのカットに意味があると示唆すると、挿入される映像に人物の心境が投影されていることに気付いていった」という。

野口氏は、東日本大震災の発生翌日から被災地に入り、現在も取材を続けている。また、2019年3月に、在仙のNHKと民放テレビ局4局が共同で『NHK・民放番組上映会 テレビが伝える東日本大震災』を開催し、同時開催のトークセッションにも登壇した。3

■パネルディスカッション

後半は、番組アーカイブの価値や利活用方法についてディスカッションを行った。今村教授は「社会や時代を多角的に分析する際にアーカイブは必須。番組は、映像、音声、編集効果など様々な表現様式を含んでおり、例えば“絶望”という感情の表現でも、10年前と現在では方法が異なっている。技術の進歩や時代の変遷と共に表現がどう変化したのかも、アーカイブを使って分析できる。過去の資料を次世代に伝えていくためにも、アーカイブ資源をますます充実させていく必要がある」と語った。

太田講師は「地方で文化を学ぶに当たり、大学は重要な拠点となる。中でもテレビ番組は、地方在住の学生にとって存在感を持つメディアで、教材としても親近感がある。しかし教員個人が

それらを収集するには限界があり、専門外のジャンルにまで気を配るのは難しい。充実したアーカイブが利用できるのはありがたい」と話した。

鳥羽教授は「安部のオリジナルは1つでも、複数のディレクターの手で新たな作品が生まれ、文学研究も広がりを見せる。シンプルで寓話的な短編小説は、テレビ版では和田勉の緊張感溢れる演出で、リアリティのあるドラマとなった。それぞれのメディア特性に合わせた展開が研究の幅を広げた」と振り返った。また「メディアに関心のある学生は、昔の番組の自由さに驚いていた。番組作りが委縮している現在と比べ、途中から聞くと意味が分からないほど難解なドラマが作られていたことを再発見していた」と語った。

仙台での番組上映会について、音教授が「各人の中にある震災の記憶を、放送局が番組化して改めて提示することで、共通の体験をした人々が過去の出来事を再確認する場になっていたように感じた」と問うと、野口氏は「長い時間をかけて番組を制作するが、放送は一瞬。テレビはそういうメディアと認識しているが、もったいないと思う部分もある。アーカイブという形で色々な人に見てもらえるのは制作者として嬉しい」と答えた。上映会等の二次利用で問題となる権利処理については、「震災は、教訓を伝え続けていくことに意味がある。ローカル局として地元の映像を継承し、後の教材として保存・利用していくためにも、今後議論すべき点だと思う」と語った。

今後の課題について、今村教授は「今の学生にとって、“番組”はスマホで見る多くの情報の中の1つに過ぎない。単に保存するのではなく、デジタルデバイスと親和性のある環境作りが大切だ」と指摘した。鳥羽教授は「50～60年代の番組の多くは残っておらず、シナリオや資料も散逸していて総体的に研究する体制になっていない。埋もれている番組や資料をどうやって遡及的に発掘し、収集していくかが課題だ」と語った。音教授は「欧米では映像アーカイブ自体が文化政策の拠点として認識され、外交や国際政治での有効なカードとしても注目されている。歴史を記録し続けるアーカイブそのものが有力な装置であり、貴重な財産だという意識を広めていくことが必要だ」と締めくくった。

公開セミナー ラジオを楽しむ！(9) 『TBSラジオ年末交通情報～おまけ付き～』

10月27日、公開セミナー「ラジオを楽しむ！」を開催した。今回はキャスターへの密着取材や座談会で交通情報の裏側をドキュメンタリー風に紐解いた番組を取り上げた。冒頭から56分間は、番組最後に生放送される交通情報の“おまけ”という、ユニークな番組である。

【ゲスト】 福田展大 (プロデューサー / TBS グロウディア)
刈屋瑛子 (ディレクター / TBS グロウディア)
【司会】 ペリー荻野 (コラムニスト)



番組を制作した福田氏と刈屋氏は、同じ大学の同じサークル出身という間柄。制作を開始したのは放送の7か月前で、企画は「雑談から徐々に生まれてきた」と福田氏が振り返った。番組冒頭から56分間“おまけ”という斬新な発想は、別番組で、人の少ない公

園で花見客に「この後中継が来るから、嘘でも盛り上げてほしい」と依頼する段階から放送した経験がヒントとなったという。福田氏は「普段聴き流していることを、作る工程や裏側を知った上で聴いたら、感動的に聴こえるのでは」と思い、それに合うテーマが交通情報だった。2人とも特に交通情報に思い入れがあったわけではなく、むしろ「車に乗らないから軽視していた部分もある」と刈屋氏は振り返った。

セミナーでは企画書も公開。ナレーションを『情熱大陸』の窪田等氏にすることやCMの本数等、具体的な部分は企画書の時点で決まっていた。また、ペリー氏が「ハッと気付くような面白さが仕掛けてあり、ラジオラバーの番組だと感じた」と評したとおり、ラジオ好きの心を掴む小ネタが随所に散りばめ

られた。挿入曲はドライブに関するもの、BGMは各番組の交通情報で使用している曲を選んだ。

制作過程で最も苦労したのは、面白い落下物や放送中のハプニングを紹介するための、過去の音源の搜索作業。資料も無く、番組関係者も覚えていない中、刈屋氏がSNS等から得られる放送日時の情報を頼りに、音源を一つずつ「祈りながら聴いた」という。

この番組のメイン、生放送での交通情報は、中島みゆきの「ヘッドライト・テールライト」に乗せて伝えられた。刈屋氏は「時間内に収まらなかったらと緊張した」と振り返った。無事成功すると、スタジオ内で拍手が沸き起こった。放送直後の反応は、今までにないほど良かったという。

会場には、番組に登場した交通情報キャスターの碓氷浩子氏も来場し、警視庁交通管制センターの様子等、より臨場感溢れる裏話を聞くことができた。来場者からは「ラジオの面白さを再確認できた」という感想もあり、番組にとどまらず、ラジオそのものの面白さを実感できたセミナーとなった。

■公開セミナー 第48回名作の舞台裏 『花へんろ 特別編 春子の人形』

11月16日、テレビドラマの制作者や出演者が自らの番組を振り返る公開セミナー「名作の舞台裏」を開催した。今回は、脚本家・早坂暁氏が、少年時代の体験をもとに、亡き妹への思いと平和の尊さをテーマに創作した最後の作品『花へんろ 特別編 春子の人形～脚本家・早坂暁がつくしむ人』(NHK BS プレミアム) を取り上げた。

【ゲスト】坂東龍汰(出演)、芦田愛菜(出演)
富川元文(脚本)、平山武之(演出)
【司会】渡辺紘史(放送人の会)



セミナー当日は、2017年12月16日に急逝された早坂暁氏の月命日だった。『冬の桃』(1977/NHK) 以来の付き合いである平山氏が、早坂氏と最初にこの作品の話をしたのは2017年の春。早坂氏は80歳を超えてからは脚本を書いていなかったが、早坂ドラマを見たいという要望は多く、最後にもう1本とお願いしていたところ、広島8月6日関連で、原爆で亡くなっ

た早坂さんの妹さんを取り上げる企画があり、それと合体させる形で『春子の人形』の執筆が決まった。平山氏と同様に早坂氏と縁が深く、また「人間味溢れる早坂氏の脚本が一番好き」という富川氏がこの企画に関わることになった。

キャスティングについて、平山氏は、主役の良介のオーディションで坂東氏を見て「自分を表現することが素直にできる」と思い抜擢した。また春子は、最初に台本を読んだ時に、「芦田愛菜さん以外にない」と思いオファーした。坂東氏が「当時、芝居はほぼ未経験だった。撮影に入り、キャリア不足に悩んでいた時、監督の『君は真っ白だから選んだ。君は白いご飯で、周りの人たちがおかずになりドラマはできていく。主演は、純粋に感じたまま、自由に芝居をしてよい』という言葉に助けられ、そこからリラックスすること

ができた」というエピソードを話すと、平山氏が「昔、早坂さんから言われた言葉を思い出し、坂東君に告げた」と明かした。芦田氏は「早坂先生にとって大切な春子さんを演じさせていただけるのは光栄だと思った。すごく一生懸命で純粋な女の子だと感じた」と振り返った。母親から「良介は実の兄ではない」と告げられるシーンの表情など、平山氏は「13歳の少女の微妙な心の動きが出ていた」と、芦田氏の演技を絶賛した。

富川氏は「この作品の3分の1位を早坂さんが書いた。自分は、今まで早坂さんが残してきたものを効果的に構成し、早坂さんが書いたセリフが生きるように心掛けた」という。富川氏が加えたのは、東京大空襲のエピソード。「広島だけでなく、日本全国の主要都市が被害にあったことを感じ取ってもらいたかった」と話した。

良介が春子の幻影を追って浜辺を走り出していくラストシーンの後に、玉置浩二氏が歌う「みんな夢の中」のフレーズが2分続く。この歌は早坂氏が大好きな歌だった。

心に染みるドラマの上映とその作品作りに携わったゲストの誠実な話に、会場からは惜しみない拍手が送られた。

■番組を視聴する会 第7回 スポーツと放送の人間模様

9月13日～10月6日、競技やスポーツ放送を支える人々にスポットを当てた「番組を視聴する会」を開催した。取り上げた番組は、『ラジオ体操今昔 ラジオの声で健やかに』(2005/NHK)、『メディアの嵐 [2] スポーツ番組の影武者たち』(2003/テレビ東京)、『我流の競馬実況アナウンサー 吉田勝彦』(2014/ラジオ関西)、『20世紀広島あの時 東京オリンピック』(2000/中国放送)、『いきいき!夢キラリ 車いすアスリートにかける夢』(2006/大分放送) など20本。来場者は207人。

■2019秋の人気番組展

10月19日～11月24日、地上8局・BS8局の協力を得て、恒例の「秋の人気番組展」を開催した。今回からは新たにJ SPORTSが加わり、各局の新番組や人気番組のポスター、台本、セット模型・デザイン画等を展示した。

会場入口では、テレビ神奈川『猫のひたいほどワイド』の企画で出場したカーレースで使用された「猫ひた号」が来場者を出迎えた。各局のブースでは、TBSの音楽番組のセット模型やフジテレビ『シャーロック』の小道具を熱心に見る姿、またテレビ朝日の“パイナップルの被り物”やテレビ東京『出川哲朗の充電させてもらえませ

んか?』の顔出しパネルで記念撮影を楽しむ姿などが見られた。来場者からは「毎回、台本やセット模型が見られて嬉しい」「様々なテレビ局の情報が集まっているので役に立つ」「次は家族と来て写真をたくさん撮りたい」等の感想が寄せられた。



■令和元年度第2回番組保存委員会

11月28日、令和元年度第2回番組保存委員会が開催された。主な議事は以下のとおり。

◇令和元年度保存対象番組の選定

テレビ番組は平成29年度放送の1,800本を保存対象番組として選定、ラジオ番組は平成30年度、令和元年度放送のNHK、民放局58社の合計165本に加え、11月以降に発表される受賞番組約200本を追加して選定した。また、平成18年度から22年度の民放連賞と放送文化基金賞の番組で未保存の71本、ならびに昭和44年度制作の協賛番組50本の提供依頼を行うことを承認した。

◇保存番組複製基準の改定

番組複製基準の改定案について審議し、次回委員会での継続審議とした。

◇委員会委員の任期

番組保存委員会の委員任期の変更案について、承認した。

◇中学・高校での教育利用

学校、教育関係機関等に対し、中学・

高校での放送番組の利活用について、学校や関係各所にヒアリングした結果と今後の進め方について報告があり、了承した。

◇サテライトライブラリーおよび大学利用の状況

公共施設、大学での番組利活用状況とNHK・民放合同上映会について、2019年8月に広島で実施した報告と2020年3月に予定する仙台での実施について報告があり、了承した。

◇デジタルアーカイブジャパンの動向

本年度に開催された推進委員会と実務者検討委員会の議事内容ならびにジャパンサーチ試験版の運用状況等の報告があり、了承した。

■公共施設・大学での番組利活用

【ミライon図書館】

10月5日、長崎県大村市に、県立・市立一体複合型図書館施設として新しく開館したミライon図書館内で、放送ライブラリーで公開しているNHK・地元民放局制作の番組31本の視聴を

開始した。

主な番組は、『国宝への旅 クルスの堂は七色の輝き 長崎・大浦天主堂』(1986 / NHK)、『ドキュメンタリー 香焼 マンモスドックの出来る町』(1971 / 長崎放送)、『人間神様』(2014 / 長崎放送)、『茜さす海 ～五島列島・10人家族の日々～』(1999 / テレビ長崎)、『追憶の島 旧野首天主堂の100年』(2008 / 長崎文化放送)、『泳げなかったカバの物語 モモと伊藤さんの愛情日記』(2003 / 長崎国際テレビ)、また長崎県出身の市川森一氏脚本のドラマ『東芝日曜劇場 星の旅人たち』(1985 / CBCテレビ)、『明日 1945年8月8日・長崎』(1988 / 日本テレビ放送網)など。

【長崎県立大学】

令和元年度後期、長崎県立大学シーボルト校国際社会学部の「時事問題研究」(井上佳子教授)の授業で、『民教協スペシャル 記者たちの水俣病』(2000 / 熊本放送)、『電撃黒潮隊 空白～述懐・ハンセン病報道～』(2001 / 熊本放送)の2本が利用されている。

■2019.9～11の新公開番組

【テレビ番組】

『スペシャルドラマ 夏の約束』

2002.8.31 / 北海道テレビ放送

『イマドキュ拡大版』

空飛ぶ車いす見たことありますか』

2017.5.29 / 山形放送

『日本遺産〔1〕 ほか計12本』

2016.11.13 ほか / BS-TBS

『金の殿 バック・トゥ・ザ・NAGOYA』

〔1〕～〔5・終〕』

2017.1.14 ほか / CBC テレビ

『美の精華 傑作選』

2018.1.2 / 岐阜放送

【ラジオ番組】

『ミュージック ドキュメント』

井上陽水×ロバート キャンベル

言の葉の海に漕ぎ出して』

2016.11.23 / エフエム東京

『横濱競馬場物語』

2016.12.11 / 横浜エフエム放送

など、テレビ66本、ラジオ18本。

新公開番組 PICKUP!

テレビ寺子屋放送 2000回記念 子育て一等賞のくに ～フィンランドのママが幸せな理由～

2016.12.24 / テレビ静岡

ディレクター：矢守志帆

プロデューサー：渡辺雅彦

1977年に放送を開始した『テレビ寺子屋』は、家庭教育をテーマにしたトーク番組である。40年にわたる番組制作が高く評価され、2017年には放送文化基金賞(放送文化)と児童福祉文化賞を受賞した。2000回記念のこの回は、福祉大国フィンランドを取材し、現地の子育て事情を紹介した。またスタジオでは、5人の子供を持つ理想のパパ代表・つるの剛士が、2度の育休で気付いたことや母親の苦労などについて熱く語った。

日本ではすっかり定着した「イクメン」という言葉はフィンランドには存在しない。約8割が育休を取得するフィンランドの父親にとって、家事や育児は特別なことではないからだ。もちろん父親の育児参加だけでなく、社会のサポートも手厚い。担当の保健師が出産や子育て、家族のサポートに関する相談に無料で応じる仕組み“ネウボラ”など、支援サービスも充実している。極めつけはベビーカー連れに用意されたあるサービス。街でベビーカーを多く見かけるのも頷ける。

豊富なサービスが整備されているフィンランド。しかし最も印象的なのは、周囲の人々の子育てへの理解である。フィンランドのママが幸せな“本当の”理由は、そこにあるのかもしれない。

◆放送ライブラリー公開番組数

テレビ番組 16,955本 / ラジオ番組 4,525本 / テレビ・ラジオ CM 11,382本 / 劇場用ニュース映画 2,683項目 (2019.11.30 現在)